

いつの間にかTSしてポケモンの世界に！

白髪少女はいいぞお

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気が付けば幼女にTS転生していた『ポケモン』と『ユウリ×マリイ』が大好きな百合オタク君。

それも転生先は『ポケットモンスター ソード・シールド』の世界線。

転生理由は分からないけれど、『ポケモン』と『ユウリ×マリイ』を愛でるべく頑張ろうとする物語。

※世界観設定は、駄文につき適当にご都合主義的な感じです。

※登場ポケモンは、ミーハーな作者の好みです。

目次

なんか生まれ変わってる!?	1
ポケチューバー	8
初めての配信	12

なんか生まれ変わってる!?

僕はいつも想像していた。

このゲームやキャラクターであるポケモンが現実の世界に居たら
どれだけ素晴らしいか。

多くの素敵なポケモンとパートナーとして信頼し合い絆を深めて
冒険へ旅立つ——そんな想像を膨らませていた。

あと、マリイ×ユウリ（※1）はいいぞお。

（※1＝ユウリはポケモン剣盾の主人公♀で、マリイはライバル
キャラ♀の1人であり、その二次創作百合カップリング）

そして目が覚めた。

「あああああセーブわしゆれた!」

夜遅くまでポケモンの孵化厳選作業を行っていたらいつの間にか
寝ていた。

大切なデータが消えてないか不安で飛び起きたら、見えるのは知ら
ない部屋。

「(っん)……(どん)？」

聞ける声が甲高くまるで自分の声じゃないみたいで、そう、例える
なら幼女の様な声。

当たりを見渡すと直ぐ近くの壁に鏡があり、こちらを覗き込む白髪
幼女が映り込んで——

「ぼっ僕……っ？」

ペタペタツと頬を触る。

すると鏡の白髪幼女の同じように頬を触り、手にはぷっくりモチモ
チの感触が返ってくる。

この幼女が僕なのか!?

そう認識した瞬間、脳裏にこの幼女の姿で過ごした日々が走馬灯の
ごとく駆け巡った。どうやら幼女として転生をしたみたいだ——
それもポケモンがいる世界に。

現状を理解できずに呆然としてしていると、僕のセーブ^変忘れた^声でやって来た女性、お母さんが心配してやって来た。朝から大声で叫んだら心配にもなるか。

安心させるために、今までの幼女らしい言動で無事をアピールしてみたが、どことなく違和感があるみたいだ。

自分としても、流石にいい大人が幼女のマネは痛いよな……って思うけど、とりあえず誤魔化せたのでよしとしよう。

この幼女、名前はサリナ。

そしてママ……お母さんというよりママと呼ばないと違和感ある。どうにも自分の中でしっくりこない。

少し過ぎたみて分かったのが、言動はこれは幼女の体に引きずられているみたいだ。だから、この様な行動をしてしまうのも仕方がない。

「ママ、ポケモン欲しいよ。僕のポケモンポケモンポケモンポケモン！」

この体も一人称が僕なので、違和感はなかったりする。

「もう、サリイッたら。起きたらソレばかりね」

仕方のない子ねと言うような表情をするママ。

だって一歩外に出れば、そこには夢醒れていたポケモンが、僕のパートナーになるポケモンが待っているのだから！

「フイーアだっているのに、それじゃダメなの？」

「フイーア……！」

足元から聞こえるニンファイアの鳴き声。下を向けばスリスリと頭を僕の体に擦り付けてくる。

この子はフイーア。ママの手持ちポケモンのニンファイア♀で、家族同然に暮らしている一匹だ。

「フイーアは家族だけど、ママのポケモンでしょ。僕もフイーアみたいなパートナーが欲しいの！」

手入れをされてサラサラなフイーアの毛並みをモフモフしながら

反論する。

「フイー♪」

「今では私より仲良さそうなのに我儘な子ねえ……しょうがない、ちよつとパパと相談してみるわ」

「やったフイー……ママ大好きフイー……」

「フイー……」

嬉しさのあまり、衝動的にママの足抱き着くとフイーアもマネしてママの足へ体を擦り付ける。

「まったくもう……誰に似たのかしらねえ♪ほら、朝ごはん食べちゃいなさい」

「はフイー……」

「フイー！」

今まで娘のサリイは自分のポケモンを欲しいと言ったことが無かった。

まだ7歳なのだから当たり前かもしれないけど、フイーアが存在が大きいのもかもしれない。

フイーアは私がポケモントレーナーとして冒険していた時の相棒の1匹で、苦楽を共にして強い絆を紡いできたはずなのに、今では私よりもサリイの方が好きみたいでよく一緒に居る。ちよつと焼けちやうわね。

サリイはポケモンに好かれやすい体質なのか、私のポケモンたちもサリイの事が好きで、外で遊んでいればウチの近くに遊びにくる野生のポケモンも混じって遊んでいたりする。

そんな娘が自分のポケモンが欲しいと言ってきたのだから、これは運命かもしれない。

パパと相談した結果をサリイに伝える。

「サリイ、どうしても自分のポケモンが欲しいのならポケモントレーナーの資格を取らなきゃダメなの」

「資格……っ？」

妖精の様に可愛らしい顔を傾けるサリイ。

「そうよ。資格はポケモンの事をちゃんと理解して、扱うことが許されていることを証明するものなの。ママも持っていて、それがないとポケモンを持つことが出来ないの」

「へえーママも持つてるんだね！すごいーいー！」

「でもね、資格はいつでも取れるけど、あつてもポケモントレーナーとして旅に出ているのは10歳になってからよ。分かったかしら？」

「うん、わかったー！」

元氣よく返事をするサリイにホッコリして顔が緩みそうになるけど、我慢してキリツとさせる。

「なので、サリイがポケモントレーナーの資格を取れたらポケモンをあげます」

「やったー！ー！」

「フィッファイー！ー！」

この子、本当に分かっているのかしら。

嬉しそうに飛び跳ねるサリイとフィーアを見て苦笑してしまう。

子供でも取れるけど、直ぐに取れるものではない。ましてや5歳になつたばかりの子に取れるかどうか。最年少でも8歳ぐらいだと記憶している。

「じゃあママ。資格取るための勉強教えてー！」

「フフツ、仕方ないわね」

簡単には取れないだろうから、気長に付き合つてあげようと考えていた私は、良い意味で期待を裏切られた。

1カ月後、サリイが満面の笑みを浮かべて見せて来た、ポケモントレーナーの資格によって。

ママから提示されたポケモントレーナーの資格取得を無事に終えた。

内容はポケモンに対する常識が全般で、復習の気分で受けることが出来た。

それでも少し時間が掛かったが、ようやく自分のポケモンが手に入ると思うと嬉しくて笑みを浮かべて資格を見せたら、ママは啞然としてた。

その翌日。

僕の初手持ちポケモンとなる子がやって来る日で、既に目の前にはピンク色と白のモンスターボールが置かれており、ポケギアでパパとお話の真最中だ。

『サリイ、まさかこんなにも早く資格を取れるとは思ってなかったよ。流石パパとママの娘だ』

「うん！」

ポケモン研究員として働いているパパは家に居ることが少なく、こうしてポケギアでお話することがほとんど。

前に久しぶりに帰ってきたパパが分からず『おじさん、だーれ?』と言われたパパが泣き崩れたのは、この小さい体に刻み込まれた懐かしい思い出だ。

『かわいいかわいいサリイにピッタリのポケモンを選んだつもりだから、大切に育てて欲しい』

「分かったっ！」

もうワクワクし過ぎて、ピンクのボール——ラブラブボールとポケギアを視線が行ったり来たりしている。

流星に待たせ過ぎたと思ったのか、苦笑しながらパパがボールから出してごらんと許可をくれたのでボールを手を持つ。

触れた瞬間、少し揺れた気がしたけど気のせいかな？

「出ておいて！」

そう言っただけボールを軽く投げると、小さい影が飛び出して僕へ向かってきた。

「サリイ!？」

お母さんの悲鳴が聞こえたが、僕は驚きつつも、漠然とこの子は大丈夫だと思い、少し大きいぬいぐるみ程のソレを受け止めた。

「ローリーン♪」

可愛らしい鳴き声で僕の頬を舐めてくる、白い毛並みのポケモン。

「こっ、これはもしや——」

「アローラロコン……!?!」

『おっ、サリィ良く知っていたね。そうだよ、その子はアローラロコンだ』

アローラロコン。

名前にアローラという地名が付く子ぎつねポケモン。このガラル地方では珍しいポケモンだ。

頭を擦り付けてくるこの子を撫でながらパパに問いかける。

「アローラじゃないのに、どうして?」

『たまたま知り合いの方が卵を持っていてね。研究しようと思って引き取ったんだ。でも、偶然最近孵化したからサリィにあげようと思つてね。喜んでくれたかい?』

「うんツツッ!ありがとうパパ、大好きツッ!」

デレデレした顔のパパと別れを告げ、アローラロコンに向き合う。

クリツとした瞳がまっすぐ僕を見つめ返す。

「コーーン」

まるで訴えかけるように一声鳴く。

「ニツクネームがほしいの?」

そう問いかけてみる。

すると——

「コンツ♪」

と短く返事の様に鳴く。

どうやら正解のようだ。

「んんん~~~~~」

初めての自分のポケモン。変な名前は付けられない。

あれ、この子の性別はどっちだろう?

「ねえ、女の子?」

「コンツ!」

「それじゃあ………コーラル!」

「コーコーンツッ!」

「よろしくねコーラル」

「コンツ♪」

「フイーラー！」

新しく家族になったアローラロコンのコーラルと、足元で構ってほしそうに鳴くフイーアを両手で抱きしめて、クタクタになるまでじやれ合い尽くしたのであった。

ポケチチューバー

この体になって良かったこと、悪かったことがある。

良かったことは、なにやらポケモンに好かれ易い事。記憶が蘇る以前から、庭先などで遊んでいると野生のポケモンがやって来る。特にフェアリータイプが多い。

身近な例で言えば、ママの手持ちポケモンであるニンフィア♀のフィーアが一番懐かれていること。もちろんタイプはフェアリー。

そして新しくやって来た懐き度がMAXなのでは？と思われるほど甘えてくるアローラロコンのコーラルも、タイプはこおりとフェアリー、もちろんフェアリータイプが入っている。

今日の前では先輩であるフィーアがコーラルに対して何かを教えられているような、そんな雰囲気構っている。可愛らしいポケモン達が鳴き合っているのは、見ていてとても微笑ましい。

「よしよし♪」

可愛すぎて、2匹の頭を撫でてあげると気持ち良さそうにするが、フィーアがハツとなって尻尾で手をどけてきた。

どうやら重要なことを教えているから邪魔しないでと言っているみたいだ。

こんな風にポケモン達、主にフェアリータイプだと何となく気持ちが伝わってくる気がする。これは嬉しい誤算。

続いて悪い事は、女の子だという事。

やっぱり男だったので女の子用の服に抵抗があつて、今はワンピースを着させられているが、なんとも足回りが心もとない。

ポケモンシリーズの女主人公達で短パンを穿いている娘も居る。なのでせめてボーイフィッシュな格好が出来たらと思っっているけど

「やっぱりサリィは妖精の様に可愛いから、もっとフリルの付いた洋服も似合いそうね！」

僕の姿により一層可愛らしく着飾ろうとしているママの姿が。

ハア……と気落ちしながら、ふと思った——この時代、この世界

に主人公達は居るのだろうか？

もし居るなら、折角ソード&シールドが舞台となる地域に居るのだから見てみたい。マリイ×ユウリを拝んでみたいなって思ってしまった。

白黒だったゲームから進み、主人公の性別が選べるようになった。

まさに青天の霹靂であり、女主人公の可愛らしさは素晴らしく、ポケモン剣盾ではライバルキャラの1人であり、容姿や方言、キャラクターエピソード全てが可愛らしく人気を得ているキャラクターだ。

現状で出来る限りの情報を集めて確認してみたが、今のチャンピオンはダンデ。そして、ジムリーダーとしてカブやお馴染みのキャラクター達がテレビに出ていた。そこから考えると主人公達と近い世代に生まれた可能性が高い。

そんな風に考えを巡らせていると、ママが僕に尋ねて来た。

「ねえサリィ。サリィは大きくなったらポケモントレーナーになりたいかい？」

当然の質問だった。

この世界では12歳程でポケモントレーナーとして旅に出る子が圧倒的に多い。

前世で言うところの小学校までが義務教育であり、通信教育が一般的。前世で言う中学校以上は義務教育ではないのだ。人によっては早めに通信教育を終わらせて旅に出る子も居るとか。

「ポケモントレーナーになりたいけどお……」

「けどお？」

ポケモントレーナーとして大成しなかった時の事を考えてします。

ポケモントレーナーを断念した人達に対する受け皿がなく社会現象かしている、という生々しい現実が、目の前のテレビでニュースとして取り上げられており、国でそういった人達をどうにかしようとしているが、先の事を考えると不安がぬぐい切れない。

「ん~~~~」

「どうしたの、そんなに考えて」

ママの言葉を聞きながら、何となくテレビを眺めていると、今話題

のポケチューバーを取り上げているところだった。

ポケチューバーとは——ポケギア等を使い、ポケットチューブと呼ばれる配信サイトで配信活動を行う人達の事を言う。

動画投稿や生配信が行える、言うなればYouTubeだ。

ポケモントレーナーとしても、ポケチューバーとしても大活躍している人は何人もおり、その1人にインタビューを行っている場面がテレビに映っている。

特にこのガラル地方はジムチャレンジを行うポケモントレーナーをファンとして応援する文化がある。それはジムリーダーにもおり、有名な人ほどファンも多い。

それがうまくいけば、生配信などの投げ銭や広告代で富を得ることが出来る——まさに今テレビに映っている人の様に。

「ママ、僕はポケチューバーになる!」

「へえ?なんで?」

意外な返答だったのか、いつもしつかりしているママからマヌケな声が出た。

この世界では、子供がなりたい職業(?)ナンバー1はポケモントレーナーであり、ポケモンマスターなのだから。

かといって、それでお金が稼げるかと言われるれば首を傾げざるおえないし、しかし普通に就職するのみなあとと思ってしまふ。

折角望んだ世界に来れたのだから、自分の好きな事をしたいいし、好きな事でお金を稼いでみたい。

流石に、将来の為にお金を稼ぎたいと子供らしからぬ発言はおかしいので、こう言いかえる。

「えつとねえ、コーラルの可愛らしさを沢山の人に見て貰いたい!」

「フツ、サリーアはコーラルが大好きなのね」

「うんツ!」

「コーンツ♪」

どうやら違和感がなかったらしく、微笑むママに力強く頷く。

「フイーアフイー!」

すると、フイーア私は私は!?!と前足で乗っかってきたので、もう一

度頭を撫でであげる。

「フイーアも大好きだよ♪」

「フイー♪」

撫でている手にグリグリつと頭を擦り付けてくるフイーア。

「それで、どうやって配信するの?」

とママから質問が飛んできた。

家でやるならパソコンでもいいが、ウチには自分専用のものは無い。

パパのは借りれないだろうから、ママのを借りるしかない。でもどちらかと言うと自分専用の物が欲しい。

という訳で――

「ママ、スマホロトム買って?」

ここ最近覚えたおねだりポーズ。

顔を俯かせてウルウルと瞳を滲ませて顔を傾げる。

「ウツツツ……パパが良いよって言ったらいいわよ」

「ありがとうママッ!」

抱き着いてお礼を述べると、困った子ねと言いたげな表情で頭を撫でられた。

きつとパパにも同じようにすれば了承してくれるだろう。

こうして、新しい目標が出来た。

初めての配信

予想通り、パパはおねだりによってスマホロトムを買ってくれることを了承してくれた。

やはりこの体はとても可愛らしいというのが分かる。

こんな可愛い娘におねだりされたら、僕も買ってあげてしまう自信しかない。

ママがとても美人なこともあり、サリこイーア子も5歳児でありながら可愛い。比較するなら、ちやちなアイドルより可愛らしい。

だからポケチューバーをやってみようと思ったのだ。

可愛いだけでは売れない。しかし武器にはなるし、見てもらうための掴みとしては良いだろうし、何よりもちよつと楽しそうだと思うから。

さらに、これをきっかけにジムチャレンジャーになればと考えるのこと。

主人公であるユウリやホップは、ホップ自身の兄でありチャンピオンであるダンテより推薦状を貰えたが、僕はスポンサー的存在が居ない。

なのでこうして活動して認知度が上がればもしかしたら、もしかしたら……そしてジムチャレンジャーになれば近くでマリイ×ユウリが拜めるのでは……なんて。

その為には、同じ時期にジムチャレンジャーになる必要があるけど、そこはおいおい考えて行こうと思う。

でも何か忘れていている気がするんだよなあ………なんだっけ？
なにかテレビで見ている気がするんだけど……。

とりあえずは、何を配信していくかとか、どうやって宣伝していくかを考えなくちゃ！

それに打算的な事だけではなく、純粋に僕のポケモン達の熱いポケモンバトル、かっこいい所を、可愛らしい所を多くの人に見せて魅せたい。

だってこんなにも可愛らしいのだから！

「コーラルこっちむいて」

「コン?」

パシャ

手始めに、スマホホロトムのカメラ機能使い写真を撮っていく。

この子もポケモンであり、浮遊して自動撮影できるが今は自分でポチポチシャッターを切る。

うむ、ウチの子は最高に可愛くない? 可愛いよね? よし可愛い!

パシャパシャパシャ

僕がしていることを理解したのか、その場でクルツと回ったり、寝そべったりと被写体として色んなポーズを見せてくれる。

ウチの子は将来大女優になるのでは?

「サリイ、そんなに写真を撮ってどうするの?」

「ポケッター(※1)に載せて、ポケチューブの配信告知をするんだよ」

(※1||ポケッターとは、こちらの世界でのT w i ○ t t e r)

配信用のポケチューブアカウントとポケッターのアカウントは取得済み。

あとは配信告知をポケッターで投げて反応を見る。

「そうなのね。ちよつとポケギアを貸してみなさい」

「え? はい」

ママに言われてスマホホロトムを手渡すと、コーラルを抱っこするようになされた。

「こう?」

「コン?」

僕が首を傾げると、コーラルが同じように首を傾げ、その瞬間をパシャリ。

「うんッ! とつても可愛いわ♪ ママが代わりに投稿してあげる」
「えええええ!」

ママの手からスマホホロトムを奪い返すと、既に僕とコーラルの写真が投げられていた。それもすっかりとハッシュタグまでつけて。

目ざとい人に見つかったようで、既にいくつもの反応が返ってきて

る。

投稿に対してのコメントで『アローラロコンだ！ 珍しい』『この子の名前なんて言うんですか？』『一緒に首を傾げてるの可愛い』『貴女が配信をするんですか？ こんなに小さくて可愛い子なら観に行きます！』なんてものが付いてる。

なんだか最後のはロリコン発言っぽいけど、まあ気にしないでおう。この活動をしていく上では仕方のない事だ。

既にウオツチャー（※2）が3桁を超えて337人という数字が見えており、今も通知が勢いよく鳴り響き新規ウオツチ登録やコメントなどを教えてくれる。

（※2＝ウオツチャーとは、Twitterのフォロワー。ウオツチはフォロワー）

悪戦苦闘しながら通知をオフに設定して予想以上の反応にどうしようかと考える。このまま反応が無いのも印象が悪いと思うから、何かしらアクションを起こそう。

『サリーア@Shalyer 1秒前

さっきの写真はママが撮ってかってに投稿したモノだけど、みんなから沢山の反応が貰えてうれしいです！

返し切れないのでこちらでお礼を言います。ありがとうございます！

初めてのポケモン、アローラロコンのコーラルと一緒に動画や生放送をする予定なのでポケチューブに遊びに来てください。』

丁寧過ぎると違和感あるから、こんな感じで良いかな？

先程撮ったコーラルの写真もくっ付けて投稿つと。

よし、配信の準備がんばるぞ！

「あーあーテスト、聞こえていますか？」

：聞こえる！

：聞こえてるよー

：おk

：おつ、ようやくか

：声可愛くない？

：本当に幼い

：白髪なでなでしたい

ポケギアの画面端にあるコメント欄が賑わいだす。

今日は記念すべき第1回目の配信日。

ポケッターで告知しといたら既に登録者数が10000人を超えており驚きの声をあげたのは、ついこの間の事。

あとは再生時間さえクリアすれば収益化が通ってしまうのだから異常事態だ。現在も多くの視聴者が来ており、その数5000人程。

「コーーーン♪」

ポケギアに向かって元氣よく挨拶をするコーラル。

ちゃんと挨拶出来てウチの子偉過ぎない？

「フイーー♪」

そしてちゃっかり混ざってくるフイーア。

そんなに混ざりたいか、愛いやつ愛いやつ。

両膝の左右をコーラルとフイーアがバランスよく座っており、両手に花？ 状態である。

ゲームでは感じられなかった生の反応や触感に体温……。

「ギューー」

「コンッ！」

「フイー！」

2匹の後ろ姿を見ていたら、抱きしめなくなったのでそのままギョツ。

最初は驚いた2匹だけど、嬉しそうに頭をスリスリと擦り付けてくるから可愛すぎてヤバみがヤバイ。(語彙力消失)

：初っ端から美少女と美ポケモンの戯れ

：ここが天国だったか……

：かわいすぎひん？

：何かに目覚めそう

：めぎめのパワーかな

・心の奥底でだいはくはつ起きたわ・・・

「ハッ、ついコーラルとファイアの可愛さに抱き付いちゃった……」

・おまかわ

・サリィーアちゃんもかわいいよ

・おかげで目覚めました

・めぎパおじさんは通報

・拡散したい笑顔だった

「えっええと、あつありがとうございます?」

「ご近所のおじさんおばさんや、ママとパパ、それにポケモンしかないから、こんな風に赤の他人から褒められるのは成れていない所為で、戸惑ってしまう。」

・ポケッターだとしつかりしてるの感じだったのに年相応に見える

・ちよつと頬赤くなってる

・照れてるのかな?

・照れてるの可愛い

・肌白いから分かりやすいね

「ムー、あまり揶揄わないでください」

「コンコーン!」

「ファイファイ!」

「コーラルとファイアもそういつてます」

頬を膨らませて怒ってますアピールをする。我ながらあざとい。

・怒った顔も可愛い

・ゆるして

・フヒヒさーせん

・こんな顔されたらもつとしたくなっちゃう

・→通報しました

・手厳しい視聴者

・こんな幼くて可愛い配信者はなかなか居ないからね

・みんなで守ろうこの笑顔

・今は怒ってるけどね

「あつ、初めての放送だから自己紹介しなきゃいけないんだつた!」

：思い出せて偉い

：えらい

：そういえばそうだった

：可愛すぎて忘れてた

「えつと、初めまして。僕はガラル地方に住むサリィアアって言います。この右に居る子はアローラロコン♀のコーラルで、僕の初めてのポケモンです。左に居るこの子はママのポケモンでニンフィア♀のフイーアって言います。僕がポケッターとポケチューブを始めようと思つときつかけは、僕のポケモンを沢山の人に見て貰いたいからです。だってこんなに可愛いから！」

：ニッコニコで自慢しているの可愛い

：ガラルかあ

：アローラロコン珍しいよね

：ドヤ顔かわいい

：確かにこの子達可愛い

：僕っ子いいぞお

：一番かわいいのはサリィアちゃんな件

：どちらも可愛いのでチャンネル登録しました

「あつ！ そうだ、お礼言うの忘れてた。始める前から登録者数1, 000人ありがとうございます」

：お礼言えて偉い

：敬語使えて偉い

：早くスパチャ投げさせてクレツファイ

：→無理言うナツシー

：→2人共、ふぶき使うのやめて

：あとは再生時間だけか

：この調子ならすぐでしょ

「旅に出れるようになったらジムチャレンジャーになって、僕のポケモン達の可愛らしさと強さを魅せたいと思ってます！ ムフーツ」

：この自信満々マンタインである

：応援せざるおえない

：ガラルじやないから直に見れない

：まだ先の話だけだな

：ガラル地方住みの私は勝ち組

：ガラル住ネキウらやま

「今日は自己紹介と感謝だけですが、この辺で終わりたいと思います。
また次の放送にも来てください！」

：終わらないで

：もう30分経ったのか・・・

：もつとみせて

：早かったなあ

「それじゃあバイバーイ♪」

「コーーン♪」

「ファイ♪」

こうして無事に初回配信を終えた。